

論文の内容の要旨

論文題目：痕跡を生き直す：ゴーゴリの記号システムにおける反省の諸問題

氏名：安達大輔

1. 本論の目的

本論の目的は、ゴーゴリのテキストを読む経験を、事物の生成の様相を経験することとして理解することである。これは「未完成」の経験と言い換えてもよい。テキストと読解が切り結ぶ地点で「未完成」の瞬間を見定めるといことは、言い換えれば、テキストが読まれるたびに新たに起こる出来事性に注目すること、あるいは円環として閉じそうな反復においてズレが生まれるその地点と瞬間を取り出すことである。

ゴーゴリのテキストに円環を認める研究は多い。この円環は大きく二種類に分類できる。

ひとつは作者という円環であって、そこは他者なき唯我論的な空間とされる。もうひとつはテキストという円環である。前者の綴じ目がテキストの意味の収斂する究極点であるとすれば、後者の広がりには逆にそうした意味が解放される平面として考えられている。

こうした二つの円環が重なり合う様子を、ベールイは「閉じられていない8の字」と表現している。ここで重要なのは、テキストにおいて二つの円環がたがいを開きあうことによって生まれる戯れを、作者の自意識に帰する個別論あるいはテキストの戯れという一般論の、二つの円環のいずれにも帰属させないことである。さもなければゴーゴリのテキストを読む経験が見失われてしまう。

本論ではこれまでのゴーゴリ研究の成果に立脚しつつ、作者とテキストというこの二つの円環がさらに大きな円環を結ぶその瞬間にズレが生みだされるテキストのありかた（記号システム）を、反省の問題として包括的に歴史化・理論化することを目指す。反復におけるズレにこそ、ゴーゴリのテキストを読み直すことの可能性がはらまれていると考えるからである。

2. 研究の背景

ゴッティに先立つ 1800 年前後に、それまで主に哲学の問題であった反省概念は、ドイツ・ロマン主義の批評理論によって文学（批評）におけるトピックとして真正面から取り上げられることになった。

ゴッティ本人がシュレーゲル兄弟あるいはノヴァーリスの名をあげることは少なく、本論もいわゆる影響関係（受容、消化、類似……）を実証的に検証するものではない。そうではなくて、近代文学と呼ばれるものを閉域として構成しようとする思考の（常に失われた）開始点におそらく位置するであろう反省概念を中継点とすることで、ゴッティの記号システムの組成を同時代の他の記号システムあるいはメディアへと開くことができる。そのうえで、それがゴッティ固有の文体として結晶していることの歴史的な必然性と可能性を問うのである。

ゴッティの同時代には、文学・美学史研究者・批評家のシェヴィリョフが、ドイツのロマン主義者ジャン＝パウルの「ユーモア」概念を取り入れ、有限と無限のコントラストという、反省概念に近い立場からゴッティを論じている。その後ゴッティとドイツ・ロマン主義批評の関係は、おもに第二文集『アラベスク』を中心に検討されてきた。この文集のタイトルや構成が「アラベスク」というロマン主義的概念を想起させるためである。近年ゴッティの創作をロマン主義批評理論と関係づける研究が増えてきていることは確かだが、反省概念のもつ理論的・歴史的ポテンシャルが十分に検討されたとはまでは言えないのが現状である。

3. 問題設定

本論は、「反省」「反復」「反映」というキーワードを通常理解から読み替えながら、ゴッティのテキストにおける反省の問題をこの三つの側面から分析する。

まず、主体との関係から「反省」という語そのものを見直す。本論での反省は、「より良い自己になるための自己批判」といった日常で使われる道徳的意味合いとも、哲学的伝統のなかの、「主体の自己回帰」（円環）に行き着くような用法のいずれとも異なる。ドイツ・ロマン主義における芸術批評の中心概念として反省の問題を開いたベンヤミンや、その論を発展させたラクー＝ラバルトとナンシー、およびメニングハウスの研究に依拠することで、反省を自己超出と自己回帰の〈あいだ〉に置き直すことができる。こうした意味での反省は、自己のうちに他なるものの空間^{スペース}をあけ、他者とのいまだ定まらぬ関係をつくりだすのである。

差異をつくりだす反省の運動性を強調するのが「反復」である。単調な繰り返しという一般的な理解に対して、ゴッティの場合、反復は常に次なる反復の可能性に接続されているので、同一性のうちに閉ざされることがない。たとえばバールイは記念碑的な研究『ゴッティの至芸』のなかで、ロマン主義批評理論における「累乗すること *potenzieren*」を想起させるような、反復による同一性の確認が同時に別のレベルで反復されることで同一性が差異化されてゆくプロセスをゴッティのテキストに見いだしている。

自己を自己に折り返す鏡の働きとして、反省の表象作用に光を当てるのが「反映」である。ゴーゴリのテキストは「断片」「分身」「鏡」といったイメージに満ちている。過去の研究ではそれぞれ個別に焦点をあてられてきたこうしたモチーフの関係は、「反映」を歴史的・理論的に考察し直すことであきらかになる。

目の前の「いま・ここ」にある対象を映すものという鏡についての一般的な通念に逆らって、ゴーゴリにおける反映では、〈かつてあったはず〉の何ものかの痕跡がまず提示されて、その何ものかは後から探される。反映する記号は、視覚的に特定できる「この」対象を指示することと、眼に見えず特定できない「何らかの」対象を探し求める行為のあいだで漂う。対象が先行して記号がその代理となる 18 世紀的な記号のありかたに代わって、遺された記号が不在の対象を探し求める過程でそのイメージを無限に複製してゆくのである。

この場合の反映は、記号と対象の関係が〈あいだ〉で結ばれては解体される運動である。反映としての反省は同一性にやすらう記号に〈あいだ〉を開いてやる。この空虚さが、あいだの〈意味〉、関係の〈意味〉への問いを生みだしてゆく。ゴーゴリの作品や創作とはいったい何で「ある」かという、〈意味〉についての問いはそこに宿る。

ゴーゴリのテキストにおける反省を歴史的・理論的に解明しようとする私たちは、ここでいったん〈意味〉を問うことを中断して、問いそのものを可能にする以下の条件に眼を向けなければならない。反省が問題になることを可能にしたメディア的条件、反省における記号の理論的・歴史的・時間的・空間的特質、そして反省作用の構造分析とその発生の時系列的記述。記号の〈意味〉を問う私たちの記憶のありかた。

4. 本論の内容

以上の問題設定にしたがって、本論は次のようにゴーゴリのテキストにおける記号のありかた（記号システム）と反省の諸問題を検討する。

まず第 1 章でゴーゴリの前時代の知の体制を、記号と対象が一致した 18 世紀的な〈表〉あるいは絵画として理解する。これは記号の同一性を問題にする反省にとっての出発点となる。対象とぴったりと重なり合う記号のありかたがゴーゴリのテキストにおいてどのように変形しているのかを、「アラベスク」「ファンタスマゴリア」という同時代の視覚の装置と類比しながら分析してゆく。

第 2 章では、絵画の体制が崩壊したあとの記号のありかたを、記号論学者のパスによって概念化された「指標記号」あるいは「身振り記号」として検討する。記号は対象を失って、自身のうちに他の何ものかを指示する一種の身振りとなるからである。この点でゴーゴリにおける記号の身振り性は、同時代の「写真」そしてロマン主義者の好んだ「ヒエログリフ」と共通する性格を持っていることを示す。

第 3 章では、これら 19 世紀の記号の身振り性を、18 世紀の身振りに関する議論と対照することで、その歴史的・理論的背景を明らかにする。そして 18 世紀的な身振り論からの転換を画すヘルダーの議論においてく

手>が意味を把握するメディアとしてクローズアップされることに注目しながら、その<手>を隠そうとする写真の言説と、<手>を反省のメディアとして露出するゴーゴリのテキストを比較する。

第4章では、この反省の記号論的条件、すなわちゴーゴリのテキストにおける諸記号の組織を分析する。記号を時間と空間それぞれの側面から分析することで、通常想定される読書の時間が記号の<あいだ>の集積として組織し直される可能性が反省の条件となっていることを明らかにする。

記号内部にあいたこの<あいだ>は、反省を無限の運動にする構造の基礎条件である。この無限の運動を構造化しているさまざまな条件、さまざまな反省のレベルを理解することが第5章の課題となる。空虚に充填されるべきものとして<声>とその<意味>が発生してくるが、それらがなお反省構造の外部にとどまることによって、反省は停止することなく差異化の累乗の運動となっている。

第6章では、前章で明らかになった反省の構造を、ゴーゴリの創作活動の時系列にそって発生論的に記述し直してゆく。反省の前段階には、受動的な記憶である見物 - 憑依の識別不可能性がある。そこから出発して、文集『ミルゴロド』で反省をうながす身振り記号として声が前景化されることを経て、見ること - 行うことの高次の反省のあいだに<声>が<意味>を探す運動となる段階に達して、トラウマ的記憶を生き直す構造が発生していることを確認する。

結論では、『死せる魂』第一部末尾のルーシへの呼びかけを写真的風景としてとらえ直しながら、ゴーゴリの反省がもつ二つの力として、記号を意味づける物語を誘発する力と、それを語り直す現場へと読む者を常に送り返す力を指摘する。痕跡から失われた対象を探すための反省を重ねてゆくことで、そのたびごとに新たな生のリズムをつくる運動——ここに近代的な記憶のひとつのありかたを見て結論とする。